表装加工の技術を土台に〝貼る・継ぐ・折る〟を極める。

株式会社はくび堂

掛け軸や巻物の表装、ロールスクリーンなどの軸装を中心に、裏打ちや手折り、紙継ぎといった加工を得意とするはくび堂。特徴は熟練の手わざによる仕上げで、ていねいな作業には定評があります。ブックデザイナーの名久井直子さんとともに、職人さんの仕事ぶりを見学させていただきました。

はくび堂の創業は1922（大正11）年。その歴史は100年近くにもおよぶ。もともと初代の小暮利喜蔵さんが経師職人で、書画や巻物、地図、掛物などの表装を手がけていたそうだ。現在、代表取締役を務める小暮南央さんは4代目にあたる。

「大日本帝国の時代、中国大陸や朝鮮半島、東南アジアなどに植民地が広がっていったわけですが、そのたびに地図が改訂されたそうです。なので、結果的に表装加工の仕事も増えていったらしいです。いまとは違って、当時は行政や軍部、学校などで用いられる地図は、壁掛け式で大型のものが中心でしたから」（小暮さん）

戦後の日本では、誰でも簡単に詳細な地図情報を手に入れることができるようになったが、ある時期まで地図というものは軍事情報であり国家機密に属するものだった。小暮さんがさりげなく語ってくれたエピソードにも、こうした近現代史のうねりが刻み込まれている。

それはさておき、現在、はくび堂では、掛け地図やスプリングローラー式地図など、学校で用いる教材を中心に表装加工をおこなっている。

「スプリングローラー式は、アジア・ヨーロッパ・オセアニアなどの3つの地図がひとつに収まるタイプが人気なんですよ」（木暮さん）

「あれ、そうなんですか？　わたしが

（上）高速道路の路線図を折り地図に仕立てる。蛇腹折りの実演を見せてくれた職人の木暮さん。
（下）巻物の表装をおこなっているところ。淀みのない動きで部材を調整していく与那城さん。

中学生だった頃は別々だったような気が……（笑）」（名久井さん）

小暮さんは進取の気性にも富んでいて、相撲漫画家の琴剣淳弥（ことつるきじゅんや）さんと組み、オリジナルデザインの相撲グッズも製作している。それらは両国国技館の売店でも扱っているとのこと。いわば新規事業といったところか。評判も上々らしい。

今回、紹介する技術はふたつ。ひとつめは貼りと折り、もうひとつは巻物の表装だ。まずは貼りと折りを駆使した折り地図から。というか、そもそも折り地図というのは……？

蛇腹折りの妙技に呆然

「一般に販売されている地図とはちょっと体裁が違っていて、河川や道路のように曲がりくねったものをたどるための特殊な地図です。行政の担当者や、河川や道路の管理業務をおこなう方々が使うものですね。ひとまず広げてみましょうか」（小暮さん）

「あっ、ホントだ。まっすぐじゃなくてうねうねしてる！　しかもどこまでも伸びていく（笑）」（名久井さん）

製作事例として見せてもらったものは、某高速道路の路線図。広げた状態だと全長10メートル近くにもなる巨大な地図だ。一方、某主要河川の管内図は小型サイズで全長1・5メートルほど。用途と縮尺によって地図の大きさは変わる。

「なるほど……（とじっくり観察）。地図を貼り合わせたあと、蛇腹折りでコンパクトに畳み込んでいるんですね。貼りも折りも精密だなあ」（名久井さん）

「工程としては、先方から地図が送られてきて、それを我々が加工するという流れです。地図はすでに断裁されていることもありますし、こちらでカットすることもあります。ケース・バイ・ケースですね。部数はそのつど異なりますが、だいたい数百部単位というケースが多いです」（木暮さん）

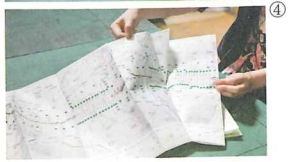
ちなみに紙を断裁するときは、古式ゆかしい手包丁をつかう。というのも、機械式の断裁機だと紙に押し跡がついてしまうから。50枚ほど重ねた紙を長定規で押さえつけ、さらにそのうえから両足で体重をかけてしっかり固定。その後、すうっと手包丁を押し引いて紙を裁っていく。

折りの作業も見せてもらった。迷うことなくすいすい地図を折っていく姿は、これぞ名人芸といった趣。とはいえ、本番前にはいちど試作をしたうえで、不都合がないかを確認するのだという。地図のかたちが直角に近くなればなるほど、どう折り込むかの判断は難しくなるそうだが、実際に折り地図を開いてみると、苦心の甲斐あってか、ごく自然にめくることができる。何のストレスも感じずに使えるよう、細かい配慮がなされているのだ。

「これなら箱根駅伝のルート地図もつ

②

③


④

①

①高速道路の路線図を広げたところ。ものすごく長い。しかも地図のかたちはまっすぐではない。②複雑な折りだが開きやすい。③畳むとこんなにコンパクトに。④基本的には蛇腹折りの構造になっている。⑤取材のため、実物と同じように、断裁した紙を貼り合わせてくれた。貼りの精度も高い。⑥左側が職人の木暮さん。70歳目前だが身のこなしは軽快そのもの。⑦折りの作業スタート。さくさく折っていく。⑧「こういうふうに直角になっていると難しいんだよ」と木暮さん。

⑥

⑤

⑧

⑦

①

③

②

①難度の高い直角部分にさしかかったものの手慣れた様子でクリア。②はみ出した部分も定型の枠内に収まるよう工夫して折りたたむ。③折り癖をつけるため定規でビシッと均す。④両足に体重をかけ、定規で紙を押さえつけながら……

手包丁でするりとカット。

④

くれるのでは？」と本誌編集部の津田。うむ、それは素敵なアイデアですな。関東学生陸上競技連盟にもちかければ商品化も夢ではない!?

巻けるものなら何でもこい

つづいて巻物の表装を見ていこう。これは壁に吊して縦方向に巻くタイプ（地図や掛け軸など）と、平置きして横方向に巻くタイプ（絵巻物など）の2種類あるが、基本的には同じ加工をほどこす。

「なんとなくは知っているのですが、表装のかたちを大まかに教えてもらえますか？」（名久井さん）

「紙の片方に軸棒を、もう片方に軸尾をしつらえて、さらに軸尾には巻尾という紐を付けます。これは巻いたとき、広がらないよう留めるためのものです。紙と軸尾の間に布などを用いた帯を付けることもあります」（木暮さん）

「本体部分の紙は裏打ちするんですよね？」（名久井さん）

「ええ。そのほうが張りも出て、紙が安定しますし、味わいも生まれます。といっても、これは予算次第。単純に紙を巻くだけという仕様も多いですよ」（木暮さん）

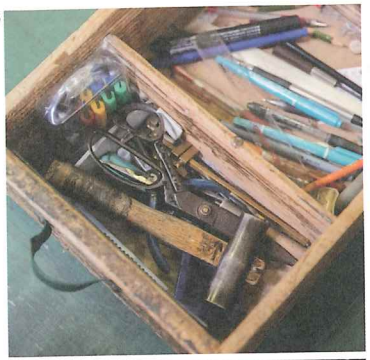
いちばん安価で簡単なものは、木製の軸棒に紙を巻いて、軸尾もボール紙などで済ませる仕立てだそう。逆に豪勢にしたい場合は、紙の裏打ちはもちろん、帯の図柄や軸棒に付ける軸先を選ぶという楽しみがある。大きさのバリエーションも豆サイズから幅4メートル程度まで、なかなか自由度が高い。というより、ほとんどの製品がオーダーメイドなのだ。

「たとえば、ご自身の書を表装してほしいという依頼もけっこうありますし」（木暮さん）

「その場合は一点ものってことですよね。失敗したら大変……。緊張しそう！」（名久井さん）

そう、ほとんどの工程を手作業でお

⑤



⑥

⑦

⑤木暮さんの道具箱。手先になじんだものばかり。⑥年季が入った手包丁。紙を断裁していくうちに刃はすりへり小さくなっていく。⑦こちらは荒川下流域を網羅した河川地図。

こなっているから、一点ものだって簡単に製作できるのだ。実は以前、本誌でもお願いしたことがある。アートディレクターの佐藤直樹さんが描いた全長100メートルほどの木炭画を、10分の1サイズに縮小し、小ぶりな巻物をつくったのである（「デザインのひきだし」31号掲載）。

ところで作業を見せていただいている途中、当の職人さんが突然緊張しはじめるという思わぬアクシデントが発生。しかし「いやあ、手が震えちゃって……」と恐縮していた割には、ほとんどミスのない仕事ぶりに感心。技術が指先にしみこんでいるのだろう。

「今日は布を持ってきているんです。裏打ちしてもらえないかなあと思って……」（名久井さん）

「ああ、どうぞどうぞ。簡単にできますよ」（木暮さん）

「やった！」（名久井さん）

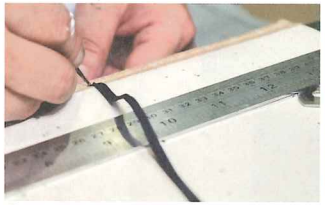
①

④

③

②

⑦



⑥

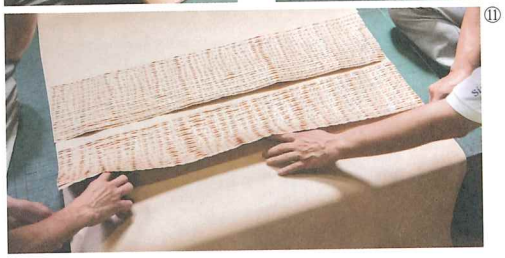
⑤

①作業場全景。左側が木暮さん、右側が与那城さんの持ち場。与那城さんが頭をつっこんでいるのは裏打ち用のプレス機。②巻物の製作スタート。まずは両面テープで本体の紙と裏打ち用の和紙をくっつける。③裏打ちしたあとは端の部分をカット。紙の体裁を整える。④金槌でやさしくトントン叩いて圧着を高める。このあとプレス機へ。⑤紙の端に軸尾を付ける。軸尾の素材は竹。コストを抑えるときはボール紙をつかうことも。⑥軸尾に巻尾（紐）を付ける。⑦木軸を巻きつけている。

⑧

⑩

⑨



⑪

⑫

⑬

⑭

⑧巻尾（紐）の先に留め具を付ける。⑨巻物完成!⑩大判の紙を貼り合わせる作業。およそ4ミリ幅に紙をずらして刷毛で糊を塗る。⑪さらにふたりがかりで紙の束を2つに分け……⑫息の合った作業で紙を貼り合わせていく。⑬手足を駆使した無駄のない動きは現代舞踏のよう。⑭オーソドックスな掛け地図。左側が代表取締役を務める小暮南央さん。はくび堂4代目。

持ち込みの布地を裏打ちすると？

というわけで、持ち込みの布地の裏に和紙を貼って〝布クロス〟の状態にしていただこう。いわばアイロンをかける要領で、巨大なプレス機で120℃くらいの熱を40秒ほど加えれば、あっというまに仕上がる。裏打ち用の和紙には、あらかじめホットメルトが塗られているので、同サイズにカットしたものを布地に重ね合わせるだけなのだ（といっても、当然、細かな職人芸は、そこかしこに盛り込まれているのだが）。

「わあ、うれしいなあ。オリジナルの布クロスがつくれるってことですよね。あ、そもそも裏打ちだけをお願いすることって可能なのでしょうか？」（名久井さん）

「ええ、全然かまいません。もともと、そういったご要望にも対応しています。

けっこうな頻度で、内装関係の方から壁紙用に裏打ちしてほしいというご依頼もありますよ」（小暮さん）

なるほど、裏打ちすれば壁に貼るときに、糊が表側ににじみでてこなくなり、好みの紙が壁紙としてもつかえるようになるということか。優れたアイデアがあれば技術は活きるし、高い技術があればアイデアの源にもなる。技術とアイデアは両輪であり、そのふたつが柔軟に組み合わされば、小さなイノベーションがいくつも生まれてくる。創意工夫こそがデザインに彩りを与えるのだ。

「そうだ！　あの仕事でこの布クロスを使えば……。巻物はもとより、小部数の上製本などにも使えそうだし、夢がひろがりますね」と名久井さん。さっそく現場からヒントをもらったようだ。

名久井さんが持ち込んだ布を裏打ち。ホットメルト付きの和紙を重ねてプレス機へ。

株式会社はくび堂
埼玉県川口市江戸1-3-5
☎048-290-8673
http://www.hakubido.com
https://www.hakubido.jp